

<寄稿要項>映画「セブン」を見て(読書・映画・音楽)

村上, 道明

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

122

(終了ページ / End Page)

122

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019915>

映画「セブン」を見て

村上 道明

この前、セブンという映画を見た。最近流行の猟奇殺人をテーマとしている映画だ。この映画を見ている間、どうしても主人公の刑事達よりも、追われている殺人鬼ともいうべき犯人の事の方に興味を覚える。

犯人は、キリスト教の7つの大罪をもとにして、ある種の芸術家のように殺人を犯していく。例えば、強欲な弁護士を殺した後には、GREED（強欲）という文字を残しながら殺人を犯していく。そして、その最後の大罪を完成させるため、犯人は追っている刑事の妻を殺し、その首を刑事に見せ、刑事を逆上させ、自分を殺させるのである。

犯人は何故、自分を殺させたのだろうか。犯人は何故、自分の犯罪を完成させるために自分を犠牲にしたのだろうか。

『鬼平犯科帳』

武田 千佳子

私は時代小説ファンである。中でも池波正太郎の『鬼平犯科帳』（全24巻）が好きで繰り返し読み、今では登場人物がごく身近な存在に感じられる程になった。『鬼平犯科帳』いわゆる「鬼平」は捕物でありながら謎ときだけの捕物帳ではない。「鬼平」の最初の巻が出版された時、池波正太郎はその「あとがき」のなかでその旨を記しワンパターンになってしまふのを避けたかったのだとしている。

「鬼平」は主人公の火付盗賊改方長官、長谷川平蔵らだけでなく、江戸の暗黒面や盗賊の世界にも眼を配った世話物の味をもつ連作である。登場する盗賊の世界は大きく二つに分かれており、真の盗賊のモラルとして

*1 一、盗まれて難儀するものへは、手を出さ

ぬこと。

一、つとめ（盗み）するとき、人を殺傷せぬこと。

一、女を手ごめにせぬこと。

の三カ条をあげ、これから外れた泥棒を「あさましい」と見てこの卑劣非道に対し情け容赦なく鬼平の罰がおとされるのである。鬼平はただ恐しいだけではない弱さも大きな優しさもある。そして鬼平の人柄にほれ込んで一緒に働く元盗賊（密偵）や同心達、昔からの悪友など力になる人間が沢山いるのだ。現在就職活動中の私は鬼平のような上司のいる会社に入れたらいいなと感じている。同時に自分の理想でもある。「人間*2というやつ、遊びながらはたらく生きものさ。善事をおこないつつ、知らぬうちに悪事をやってのける。悪事をはたらきつつ、知らず識らず善事をたのしむ。これが人間だわさ」酸いも甘いもかみ分けた鬼平の人間観が表われている。

普段時代小説など読まない人も、一度読んでみて欲しい。現代社会で欲している暖い心が見つかるともかもしれない。

〈注〉*1 「浅草・御厩河岸」（第一巻）

*2 「谷中・いろは茶屋」（第二巻）

（通教部4年）